

平成 30 年度

アーティスト・イン・レジデンス研究会  
及びトークショー  
報告書

REPORT 2018



## CONTENTS

- 03 はじめに
- 05 研究会レポート
- 13 参加者からのエッセイ、寄稿
- 23 資料集
- 30 あとがき

## 産地でおこなう 「アーティスト・イン・レジデンス」の意義

昨年度に引き続き、平成30年度も文化庁のアーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業(補助事業)として、陶芸の森の主催で「アーティスト・イン・レジデンス研究会」を2回にわたり開催することができました。関係していただいた皆様に改めて感謝いたします。

### アーティスト・イン・レジデンスとの関わり

少し個人的なことから書き始めることとなりますが、私と「AIR」の一番初めの関わりは、1980年代中頃のアメリカのアーチャー・ブレイ・ファウンデーション(Archie Bray Foundation 以下ABFと略す。)になります。当時、カリフォルニア美術工芸大学の修士課程に在学していたのですが、修士課程を終えると、自分の制作場所がなくなるという困った状況で、当時お世話になっていたギャラリーから紹介されたのがモンタナ州にあるABFだったのです。ディレクターは、カート・ワイザーさんという作家。全員合わせても10人弱というこじんまりとしたアット・ホームなレジデンスでした。ここで、制作させてもらった3年余りが、私のレジデンス初体験です。つくり手、あるいは、レジデンスのユーザー側として多くの貴重な経験をさせてもらいました。

その後日本に帰ることになり、陶芸の森では、開設当初から職員としてお世話になっています。当時は、「AIR」という略語はもちろんなく、「アーティスト・イン・レジデンス」という言葉も知られていなく、私たちが最初に使ったのは「滞在型共同工房」という造語でした。1990年代の初めのことです。

その後、行政でもカタカナ言葉を使いだすようになり、ここ15年程前からは、「アーティスト・イン・レジデンス」という単語で少なくとも一部の行政関係者にも通じるようになってきたというのが実態です。このことには、文化庁がその政策の中で「アーティスト・イン・レジデンス」という文化事業の一手法をはっきり打ち出したのが大きいと思います。

陶芸の森のレジデンスが始まってもうすぐ30年になるのですが、私は、個人的な思いも含めてこの数年「仕事のとりまとめ」にかかっています。「経過」をまとめておくというのは重要なことです。またここ2年ほどは、「事業の分析」に集中的に取り組んでいます。私の立ち位置は、オペレーターなので「事業の分析—判断—実施」という「システム構築」と「より良いオペレーション」を「事業分析」から見つけ出したいと思っています。

### 産地でおこなう「アーティスト・イン・レジデンス」の意義

この研究会で当初からテーマに掲げていたのは、陶芸の森で平成28年度に企画開催した関西広域連合主催の「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」の流れを汲んだ「レジデンスの運営と評価」ということでした。このようなむずかしいテーマを掲げ、昨年度3回にわたって開催したのですが、まず、参加していただいているレジデンス機関同士が「お互いに知り合う」ことから始めなくてはということから、各機関の所在地=産地で開催することにしました。

見えてきたのが、このグループはみな、「アーティスト・イン・レジデンス」を産地でやっているんだという当たり前のことでした。これは、今の日本のAIRの中では特徴的なことで、現代美術やパフォーマンス系のレジデンスではないことです。地域にベースがあるのですから。

このことを踏まえて今年度2回の研究会を関係の方々とも相談のうえ開催しました。9月に東京の女子美術大学で開催した研究会ではこのことを強く訴えさせていただいたと思います。

### アーティスト・イン・レジデンスのオペレーション

また、陶芸の森で12月に開催した研究会では、純粋に「運営」について議論できたと思います。事業のオペレーションに必要な、「事業の分析—判断—実施」というシステム構築とオペレーションを「陶芸の森の事例」をベースにみんなで評価してみようという試みでした。



杉山 道夫

公益財団法人  
滋賀県陶芸の森事務局  
次長(技術)兼創作研修課長

1960年アメリカ生まれ。1979年京都市立日吉ヶ丘高等学校陶芸科卒業。1980年大阪芸術大学工芸科入学、在学中にカリフォルニア美術工芸大学に留学。1986年カリフォルニア美術工芸大学修士課程修了後、アーチャー・ブレイ陶芸研究所で89年まで滞在制作。1989年に帰国後、滋賀県商工労働部陶芸の森開設準備室、公益財団法人滋賀県陶芸の森開館後から現在までアーティスト・イン・レジデンス事業の現場の企画運営に当たる。IAC国際陶芸アカデミー会員。

陶芸の森は、30年近く運営しているわけですから、「プラスのこと」も「マイナスなこと」もそれなりにいろいろ経験しています。その経験を資料にして議論のまな板に載せてみました。評価の方法については、定量評価とエピソード評価のふたつがあります。項目ごとにデータを積み上げ、数値化するというのは、比較的やりやすいですが、エピソード評価には、時間がかかるものがあります。その関連資料を抜粋したものをこの報告書の末尾に記載させていただきました。参考にしていただければと思います。

### これからのアーティスト・イン・レジデンス

今の時代「アーティスト・イン・レジデンス」は、そこに参加する作家のステップアップの方法の一つとして、運営側、作家側双方から認識されているように思います。また、アート为社会貢献が求められている時代なので、そのことをレジデンスの目的とするような考え方も多くなってきています。ただ、アートの社会貢献といっても、社会とアーティストの関係にはいろいろなかたちが考えられます。私は、アーティストが、レジデンスを通して社会と関係づけられるのであれば、それはアーティスト以上に運営側の思いやシステム構築によるべきものと考えています。一義的には、アーティストの表現活動をサポートするのがアーティスト・イン・レジデンスの基本だと考えています。

### 産地でおこなうアーティスト・イン・レジデンス

今の日本の陶芸関連人口は概ね次のように分類されると考えます。日展や日本工芸会など古くからある業界のシステムにかかわっておられる、いろいろな肩書きをお持ちの方。いわゆる前衛を押し通すベテラン作家たち。大学などで教鞭を執る中堅、そしてこれからやきものを生活の糧としていこうとする若手たち。また別の視点で見ると主として産地で活動する技術者たちがいることも見逃せません。

その産地に関わろうとするデザイナー、陶芸家たち。それと美術館を拠点とする研究者たち。作家と買い手との間をとりもつギャラリー、バイヤーたち。メディアに属する人たち。以上は、とりあえずプロとよばれている人たちです。そしてそのほかに大学でやきものを学ぶ学生たち。各地にある陶芸教室、カルチャーセンターで学ぶ優れたアマチュア陶芸家。以上がおおざっぱではあるが陶芸関連人口の内訳です。

陶芸をやっていく上で個人個人の感性が重要なのはあたりまえですが、優れた環境は創作の可能性を増します。もともと産地には以下の要素がありました。

- 原材料が豊富にあり、ほしい材料がすぐに手にはいること
- いろいろな種類の機材、道具が周りにあり貸し借りができること
- 若手からベテランまで様々な方向性を持った同業の士が周りにいること
- 客観的評価ができる者が周りにいること
- 近くに販売網の拠点があること

例えば、京都の清水焼では、五条坂に共同の登り窯があったと聞きます。付近に工房を構える陶工が窯が焚かれるたびに製品を持ち寄って来て共同で焼いていました。信楽についていえば、京都から作家が焼き屋(メーカー)に入入りしていた。焼き屋で花器の原型をつくるかわりに自分の仕事をさせてもらう。そうやって焼き屋は、新商品をつくりだしていったのでしょう。

このような、相互扶助的な仕組みを「産地のアーティスト・イン・レジデンスの原型」といえないでしょうか。また、焼き屋さんの中にも人材育成のシステムがあったように聞きます。優れた技術者が、工場長として現場を仕切っており厳しいかもしれませんが、そこで働いていれば、やきものいろいろな技術を学ぶことができます。また、生産ラインの一部ではなく、やきものづくりの全体像が見渡せるようになっていました。このような、環境で学んで独立していくというのが、従来は産地の人材育成であったと聞きます。

近年、どの産地も同じで、景気が良いという話は聞きません。産地の人口も減少傾向にあります。そのような中で、アーティスト・イン・レジデンスが果たせる役割というのは、やきものをやりたいと考える若手を迎え入れる入り口の役割と、地域外の同業者がモノをつくる現場を見ることによる刺激であろうと考えます。

産地の活力源の一つとして、「アーティスト・イン・レジデンス」は、直接的ではないにせよ効果はあると考えます。2回の研究会を終えてその効果を認識するためにも、今回取り上げた「運営のマニュアル」、「評価基準」ということが、重要であると改めて認識しました。



陶芸の共同工房（信楽）

# 女子美術大学（杉並キャンパス） 第1回目研究会＋トークショー

- ／日時 2018年9月23日（日）～24日（月・祝）＊2日間  
 ／場所 女子美術大学杉並キャンパス 1号館 2F（〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8）  
 ／モデレーター 菅野幸子（AIR Lab アーツ・プランナー／リサーチャー）  
 日沼禎子（女子美術大学教授、AIR ネットワークジャパン事務局）

## AIR 研究会

2018年9月23日（日） 13:00-

### 1 大学教育の現場から

#### 女子美術大学 工芸学科工芸専攻における教育

吉田潤一郎（女子美術大学 工芸専攻 教授）

同学では、毎年1学年約50名の学部生が入学し、大学院博士前・後期課程を有している。学部での指導においては、1年次には工芸の5分野（染・織・刺繍・陶・硝子）を約4週間ずつ実習した後、2年次にテキスタイルコース（染・織・刺繍）、陶・硝子コースを選択。3年次に専門分野を絞り込み、4年次で卒業制作を発表し学位を取得する。卒業生のうち数名は、滋賀県立陶芸の森、瀬戸市新世紀工芸館でのAIR体験をしており、卒業後のキャリア形成への期待を寄せる一方で、滞在中の制作環境、選考方法などの諸条件を参照しながら、どのように在学生たちへ橋渡しができるのか、教育現場の立場として課題と考えている。

#### AIR と美術大学との実験的取り組み＜Y-AIR＞について

村田達彦（遊工房アートスペース 共同代表）、辻真木子（遊工房アートスペース コーディネーター）

遊工房アートスペースは1989年より、海外からの滞在制作を希望するアーティストを受け入れており、近年、私設であり小規模、グラスルーツで質の高いAIRを「マイクロレジデンス」と名付け、国際ネットワークを提唱し活動を行なっている。中でも、マイクロであるAIRと、マクロの存在である大学および教育機関との連携による、若手育成プロジェクト「Y-AIR（AIR four young）」を実施し、ロンドンケース（東京藝術大学、セントラル・セントマーチンズ、ACME スタジオ）、チェコケース（女子美術大学、西ボヘミア大学）などのプロジェクトを展開しており、AIRの社会装置としての顕在化とアーティスト、マネージャー育成を行なっている。



### 2 各レジデンスの近況報告

#### 滋賀県立陶芸の森 | 杉山道夫

陶芸の森のレジデンスに見る作家の受け入れとその効果について。著名な現代美術アーティストによる土を使った新作制作の受入を行うことにより、やきものを自らの表現として取り組む場として定着し始めていること。長年のAIRの経験から見た、新進気鋭、焼き物の最前線にいる注目すべき作家の紹介を行った。

#### 益子国際工芸交流館／益子陶芸美術館 | 阿部智也

益子では地域に多く住むほとんどの作家が器などの実用品を制作していることから、AIRプログラムでは同じく器、テーブルウェアに取り組む海外作家を招いており、さまざまな技法や情報、各地の風習などを地域と共有できるような環境づくりを行なっている。今回は、昨年度招へいアーティストの成果展と、今年度の滞在アーティスト3名の活動について紹介。地元にはない原料を使って釉薬を作るところから取り組んだ例、近年新たに築いた薪窯での制作、招へい作家によるスリッパウェア制作の様子が紹介された。

#### 瀬戸市新世紀工芸館 | 山崎真以

2000年より「Seto International Ceramic & Glass Art Exchange Program」としてやきものとガラス制作に取り組むアーティストを招へいするAIRに取り組んでいる。2018-2019はガラスに特化し、教育機関との連携をテーマとして、ガラス教育に関するプログラムを合わせて実施。GEN会議\*に参加する教育機関からの紹介、および国内作家の公募により2名の作家を招へいし、公開制作、シンポジウム、展覧会などを実施した。

\*GEN（Glass Education Net）は、国内のガラス教育機関（大学、研究所、専門学校等）により組織され、情報交換と日本のガラス教育の活動を世界に紹介することを目的としている。

#### 京都芸術センター | 勝冶真美

京都芸術センターの施設および、若手アーティストの育成・支援を目的に、美術、音楽、ダンス、演劇など多様な表現を受け入れるAIRプログラムの概略について、また、AIRアーティストの活動のプロセスや成果を発信するためのインスタグラム活用の例を紹介。同センターは2019年2月、国際的なAIRネットワークである「resartis」の京都大会の開催を予定しており、会議への参加を呼びかけた。

## 事業紹介後の課題共有、ディスカッションから（抜粋）

**Q** 若手を育成することは重要だが、アーティストを受け入れるための評価、受け入れる体制づくり（施設やスタッフとの分業、等）はどのようにあるべきか？また、経験の少なさからのトラブル（設備破損、生活態度、文化の違い、等）にはどのように対処しているのか？事前契約などを行なっているのか？

- A**
- 審査する場合、落とすための選考ではなくプラスの面を見ていくための点数評価を取り入れている。主に、経歴に加え、提出された作品写真から技術的な点、（この施設で）完成させることができるか、特に、若手の場合は表現における期待値（伸びしろ）を計るようにしている。
  - 生活習慣の違いから、気持ちの落ち着かない作家もあり、あまり厳しく指摘はしないが、ある程度の社会常識は分かって欲しいのでその際は苦言を呈する場面がある。基本的には人と人との間にあることなので、ケースバイケースで対応するしかない。
  - これまでの経験値から、学校での指導経験がある、あるいは海外でのAIR経験の豊富な方を選考すると間違いがないと考える。
  - 事前契約（破損した場合の対処について）はしていないが、設備や道具は大事に使って欲しいと指導をしているにも関わらず、寮詰めの際などの少しのミスが破損につながることもある。少額の消耗品の場合については問わないが、高額の場合は弁償してもらったケースもある。ただし、我々、プロの流儀として、できるだけ破損に繋がらないような作業になるように指導することが肝要である。
  - 現代美術が対象の場合、映像分野も多くいるが、その場合、自分でカメラを回して撮影するアーティストは2割ぐらい。特にヨーロッパの場合、自分は撮影も編集もせず、監督するだけのアーティストがほとんどのため、日本でのアシスタント手配やカメラのレンタルが必要になる。そのため、自身で作業をするのかしないのかを事前に確認するようにし、滞りながらのトラブルに繋がらないようにしている。ただし、これまでは破損の例がないだけで、もしそのような事態になった際に、誰の責任になるのか（カメラを回していたアシスタントなのか、プロジェクトの責任者としてレンタルをしたアーティストなのか）が心配になった。事前契約で縛りをかけていくと、それはAIRというよりも（ミッションが明確な）プロジェクト（委託）。AIRにおいては、ある程度受け止めるということが必要ではないか。
  - 展覧会を行う際には、作品の輸送などの相互のギャランティを明確にするが、Invitation letterとCondition letter（日当などの条件）を作り、サインをいただき、取り交わしをしている。

**Q** AIRの意義をどのような手段で市民に伝え、成果を還元できるようにしているか？

- A**
- 滞在中、必ず1回は市民との交流の場を設けており、アーティストトーク、ワークショップ、展示など、どのような手法で行うかをアーティストと相談して行なっている。
  - NPO法人の場合は、私たちにとって還元すべき相手は誰なのか？ということとは自治体運営のところとは異なるのだろうと思う。私たちはアーティストへの教育ということも行っている。AIRの成果についてはWebサイトやニュースレター、podcastなどでの発信を行うようにしている。またその場合には、どの言語で発信するのも考える必要がある。
  - 対行政と、対市民向けとは全く違うと考える。対行政では市長への表敬訪問と行い、行政幹部にもプログラムへの認識をしてもらわなければ、事業を継続することができない。市民に対しては、不特定多数を対称として考えると際限がないため、少人数でも興味のある方へ有効な、質の高い交流をすれば良いのではないかと考える。
  - 町民の中でも陶芸家に多くきていただきたいと考えている。自治会を通しての各家庭への情報配布、作家の個展へ足を運びお知らせをする、あるいはやきものの協同組合への周知を行なっている。
  - 県民がAIR事業を誇りに思ってもらいたいが、やっていることがわかりにくく、広報、記録のアーカイブも含めて試行錯誤をしている。

**Q** AIRはアーティストの創作体験の場であることが前提であるが、アーティストにとって魅力的なAIRとは、あるいはアーティストに選ばれるAIRとなるためには何が必要と考えるか？

- A**
- 今日のお話の中では、海外の作家向けのプログラムが多い印象がある。どのような作家に来て欲しいのかということが、もっと伝わるようにすれば良いのではないかと考える。
  - 資金や施設はもちろん（考える要素）であるが、共に滞在する作家のクオリティ、性質に加え、言語を超えた表現を通じた共通言語を持って対話ができる作家が多く集まっていれば魅力的と思える。
  - やきものはプロセス、スケジュールが制作にとって重要であるが、海外ではそうした配慮がなく、完成しないのは自己責任とされるケースが多い。日本ほどAIRがきちんとプログラムされているところはない。
  - 海外でのやきもののAIR経験がいくつかあるが、選ぶ基準としては費用が安いということ。行政が行っている施設は施設利用料も安く、仕組みもきちんとしている。
  - やきものの制作を続けていくには、資金、施設など課題が多いので、そのためにAIRは自分たちの活動を受け止める場所になり得るか、これから考えていきたい。
  - 今回の研究会では、やきものの産地が主体になっているが、まだまだ産地には若い作家を受け入れる余力があるはずと考える。そのために何ができるか目下研究をしているところである。

## トークショー

2018年9月24日（月・祝）13:00-

### 多彩な技術と産地におけるAIRの役割、可能性 - ローカルからグローバルに

#### 1 「海外でのレジデンス経験」

伊藤 準（陶芸家、瀬戸）



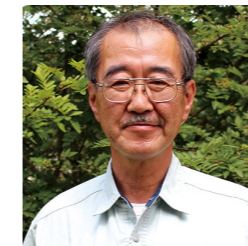
#### 2 「ヨーロッパ・セラミック・ワークセンター（EKWC）でのレジデンス」

西條 茜（陶芸家・美術家、京都）



#### 3 「益子焼の伝統的な技術、若手陶芸家の育成について AIR への期待」

床井 崇一（益子焼伝統工芸士会会長、益子）



#### 4 「私のレジデンス体験 - アジアからアメリカ、ヨーロッパへ」

村田 彩（陶芸家、信楽）



# 滋賀県立陶芸の森 第2回目研究会+トークショー

- ／日時 2018年12月11日(火)～12日(水)＊2日間  
 ／場所 滋賀県立陶芸の森(滋賀県甲賀市)(〒529-1804 滋賀県甲賀市信楽町勅旨2188-7)  
 ／モデレーター 菅野幸子(AIR Lab アーツ・プランナー/リサーチャー)  
 日沼禎子(女子美術大学教授、AIR ネットワークジャパン事務局)

## AIR 研究会

12月11日(火) 13:00-17:00 ・12日(水) 10:00-12:00

### 「レジデンスの運営マニュアルの策定」と「レジデンスの評価基準」

#### 1 各館からの近況報告

#### 2 ピア・レビューについて | 菅野幸子

AIRを中心とした文化政策研究の視点から、持続的な運営のために欠かせない「評価」についてのレクチャー。評価の定義、政府が実行する政策評価の例の中で、客観的な数値などによる評価指標に加え、近年取り入れられている「ピア・レビュー」(立場や職種が同じ専門家、経験者同士で評価・検証する仕組み)の手法について解説。

#### 3 AIR 運営マニュアルの策定と「評価基準について」 | 杉山道夫

滋賀県立陶芸の森が実施している事業評価に関係する資料をもとに、自己評価、ピアレビューのケーススタディを実施した。(＊P23-資料集を参照)



#### 4 ピア・レビュー/ワークショップ

前日の研究会を受けて、各館の担当者が3つのグループに分かれてAIR事業のピア・レビューの手法を取り入れ3つのキーワードに沿ったディスカッションを行い、グループでの発言内容を共有するワークショップを行った。(下記、抜粋)

##### ①アーティストにとっての成果

- ・作家同士、ビジネス面でのネットワーク
- ・AIRでしかつけないもの
- ・新しい体験、作風、自分に対しての変化
- ・文化の理解、異文化に触れる
- ・工芸のAIRは、新しい原料を使うことによる表現の幅、技術の向上
- ・新しい発見、ネットワーク構築。キャリアアップ、キャリアパスにつながる
- ・いろいろな人と異文化交流をすることで、アーティストとしての価値がゆきぶられる
- ・価値観の変化
- ・自らの成長
- ・AIRならではの作品。地元の材料、サイズ、制限をこえてチャレンジができる
- ・滞在するアーティストの交流、技術の交流

##### ②市民(参加者・鑑賞者)にとっての成果

- ・AIRのアーティストが地域の新しい価値を見つける
- ・ワークショップなどの交流、コラボレーション
- ・市民とは誰かが違う(ターゲットの設定)
- ・市民=陶芸を営んでいる人も市民(陶芸AIR)。その場合、新しい技術の習得、表現の幅がひろがる
- ・芸術への理解が少ないところに、長い目で見て、いろいろな人がいるということを知ることが成果
- ・都市のプレゼンスの向上。ユニークさが発見される
- ・一定数の市民が参加する場が提供できる
- ・芸術に親しみのない人にとってもハードルを下げる
- ・アーティストとのつながりができる。本人に会える。アーティストと住民が仲良くなり、陶芸の森にきてもらい、地域への取り組みへの再認識をしてもらえる

##### ③運営者にとっての成果

- ・子どもへの制作体験、あるいは制作物の販売までも実現することができる
- ・子どもたちの体験が災害支援に役立った
- ・目標に対して成果が具体的に設定されていない
- ・作家が満足したかどうか
- ・オペレーションがうまくいっているかどうか重要
- ・ハードがあるタイプかソフトであるかによって違う
- ・ネットワークが構築、蓄積されること
- ・アーティスト、施設間におけるネットワークが重要
- ・アーティストの育成
- ・国際的なプレゼンスの向上
- ・目的が明確でないと、事業を進めていくことは難しい
- ・時代によって変化していくことが運営の課題

# トークショー

2018年12月12日(水) 13:00-

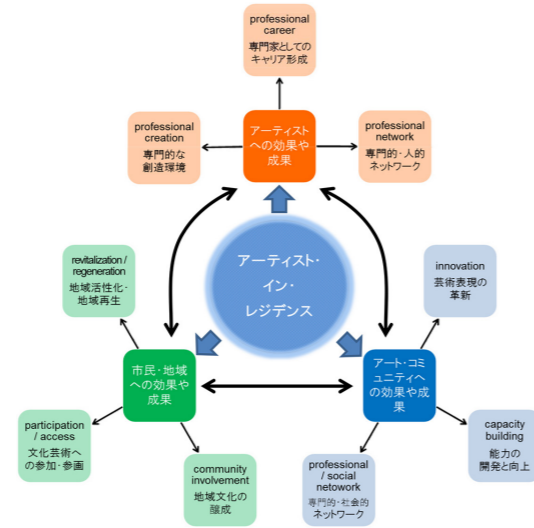
## 1. レジデンスの成果と評価を考える



吉本光宏

ニッセイ基礎研究所研究理事

1958年徳島県生まれ。早稲田大学大学院修了(都市計画)後、社会学研究所などを経て1989年からニッセイ基礎研究所。国立新美術館や東京オペラシティ、世田谷パブリックシアター、いわきアリオス等の文化施設開発、東京国際フォーラムや電通新社屋のネットワーク計画などのコンサルタントとして活躍する他、文化政策、創造都市、オリンピック文化プログラム、アーティスト・イン・レジデンス等、アートマネジメント分野の幅広い調査研究に取り組む。現在、(公財)東京2020組織委員会文化・教育委員、文化庁文化審議会委員、東京都東京芸術文化評議会評議員、横浜美術館指定管理者選定・評価委員、(公社)企業メセナ協議会理事、(公財)国際文化会館評議員、東京藝術大学非常勤講師など。主な著作・研究レポートに「諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業(文化庁委託調査、2012年度)」「文化からの復興-市民と震災といわきアリオスと(編著、水曜社)」「アート戦略都市(監修、鹿島出版会)」など。



出典:「H24年度文化庁委託事業 諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業 報告書」(株式会社ニッセイ基礎研究所/2013年)

H24(2012)年度、文化庁からの受託研究「諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業」の成果から、諸外国のAIR調査から導いたAIRの役割、社会的意義、価値、中長期的なインパクトなどの検証について解説された。この事業の報告書には、海外11カ国、37機関の調査結果と、国内65機関の基礎情報が掲載されており、AIR評価のための客観的な指針を示す資料となっている。なぜ、評価が必要なのかというテーマに対して、1つには「適切な事業運営がなされているかを点検し、改善するための評価」、もう一つは「AIRの成果に関するアカウンタビリティ」であるということ。しかし、評価を突き詰め、完璧な評価指標を精緻に作成することには限界があるため、AIRの社会的役割をいかにわかりやすく、できるだけ多くの人々に説明し、理解を得るために、評価の結果をアドヴォカシー活動に活用することが重要であり、AIR事業の経験豊富な専門家によるピアレビューも有効であると語られた。

## 2. レジデンスと地域振興の視点から



山出淳也

BEPPU PROJECT 代表理事/アーティスト

1970年大分生まれ。PS1インターナショナルスタジオプログラム参加(2000~01)。文化庁在外研修員としてパリに滞在(2002~04)。アーティストとして参加した主な展覧会として「台北ビエンナーレ」台北市立美術館(2000~01)、「GIFT OF HOPE」東京都現代美術館(2000~01)、「Exposition collective」Palais de Tokyo、パリ(2002)など多数。帰国後、地域や多様な団体との連携による国際展開を目指して、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在にいたる。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合プロデューサー(2009、2012、2015)、国東半島芸術祭 総合ディレクター(2014)、おおいとイレンナーレ 総合ディレクター(2015)、「in BEPPU」総合プロデューサー(2016~)、国民文化祭おおいと2018 市町村事業 アドバイザー(2016~)、文化庁文化審議会文化政策部会委員、平成20年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞(芸術振興部門)



BEPPU PROJECT プレゼンテーション資料より抜粋

アーティストである自身の国内外でのAIR経験と、現在のプロデューサーとしての活動を通して考えるAIRの意義、可能性についてのプレゼンテーションをいただいた。アートを軸にした地域振興を目指すプロジェクト、芸術祭が盛んに行われており、その中でもBEPPU PROJECTはその先進事例として知られているが、数々の取り組み事例を通して、AIRという仕組み以前に「なぜ今、アートや創造力が都市や地域にとって必要なのか?」ということについて山出氏は言及。「アートとは、自由なものの方や考えを促し、<気づき>を与える触媒であること」。そして、「アートや創造力は、都市や地域の暮らし、経済活動において<質>を高めたり、<新たな価値>を生み出していく要素になる」ことであると。アーティストによって見出された多角的価値をもとに、より良い地域づくりにつながるという点において、AIRなどの創造的活動は大きな可能性を持つということが語られた。

参加者からのエッセイ、寄稿

## 産地における AIR、世界の潮流から見る日本の潮流、 工芸の振興、育成などについて 陶芸とアーティスト・イン・レジデンス



菅野幸子

アーツ・プランナー/リサーチャー AIR Lab

日本は世界有数の陶芸の国であり、その歴史の深さ、地域による多様さ、高度で洗練された職人技、いずれも世界に類を見ない多彩さと豊かさを誇っている。むろん、これは日本で茶の湯の文化が発展したことにもよるのだろうが、現在に至るまでこの伝統は受け継がれている。しかし、かつて日本から盛んに海外に輸出されていた日本の陶磁器は、人々の嗜好の変化、陶磁器に代わる様々な製品の普及によって、瀬戸、有田、益子、信楽を始めとする日本の産地での生産は徐々に減少し、同時にそれぞれの町の活気も失われていった。しかしながら、この危機感が、各産地で新たな挑戦を始める契機ともなっている。

瀬戸では、ガラスアートも対象としたアーティスト・イン・レジデンス、益子では濱田庄司の縁によりイギリスの陶芸家たちを中心とするアーティスト・イン・レジデンス、そして滋賀では1992年から内外の陶芸家が滞在しながら創作活動を行っており、さまざまな思考錯誤と実験を繰り返しながら作品を生み出している。この滋賀県陶芸の森美術館で長年アーティスト・イン・レジデンスに携わっておられる杉山道夫さんは、自ら、若き陶芸家たちを支援するスタジオスペースの運営を始めている。また、京都で陶芸の創作活動を行っている西條茜さんは、アーティスト・コレクティブで VOSTOK というシェア・スタジオを運営しながら、アーティスト・イン・レジデンスを始め、日本でも陶芸をめぐる新しい動きが生まれている。

伝統が継承されていく過程には、受け継がれてきた知識、美意識、技術と、新しい柔軟な発想と思考との出会いが重要であり、その出会いから刺戟と凌ぎ合いが生まれ、切磋琢磨の関係性につながる。アーティスト・イン・レジデンスの重要な役割の一つである。



伝統陶器博物館 Museu de la Terrissa 正面

さて、昨年（2018年）12月にバルセロナの近郊にある Quart という陶器生産の町にある伝統陶器博物館 Museu de la Terrissa を訪れる機会があり、ヨーロッパにおける陶芸の立ち位置を知る機会を得た。

この地では、オリーブの実や油など食物などを大量に運ぶ甕など黒色を特徴とする器を生産していたのだが、100年前まで38軒あった家内工業の工房が現在は4軒しか残っていない。それも、後継者不足でこの先どうなるかわからないという危機感から博物館が建設されたというのである。地元に残る伝統産業が失われ、地元の人々の記憶から忘れ去られないようにという思いから工房の一つを博物館に転用したのだと、学芸員が語ってくれた。ギャラリーも併設されており、バルセロナ市内にあるセラミック協会と契約を結び、年4回、陶芸作家の個展などを開催するなどして、博物館も生き残りを賭けて頑張っていた。

しかし、ヨーロッパの場合、陶工と陶芸家とではステータスが異なる。職人である陶工は単純作業を繰り返す労働者に近く、陶芸家は新しい創作物を生み出すアーティストとして認知される。また、新しいデザインや形を生み出すのはデザイナーであって、陶工にその才能は求められない。完全な分業制なのである。この点が日本と大きく異なるように思われた。日本の職人たちは、技を競い、研鑽し、そして極める。そこから、新しい表現と技術、洗練が生まれる。

また、極めた作品を愛で、敬意を払う愛好家、好事家も多い。柳宗悦は、無名の職人たちの造形物に大なる美を見出し、敬意を払ってきた。日本が世界に冠たる工芸国となり、技術や伝統が伝承されているのはこの違いによるのではないかと考える。他方、現在、ヨーロッパの国々では、手仕事や工芸が次々と消滅しており、伝統が次々と失われつつある。

しかし、この現状を憂えて、祖父母の世代から伝わってきた伝統や価値観をビジネス化しようと挑戦している若者たちも現れている。これは、嬉しい兆候である。しかし、日本のように伝統をつなぐ美意識と技術、精神を有している人間国宝、無形文財という発想は生まれにくい。

とは言え、日本の陶芸を始めとする工芸の地位が決して盤石な訳ではない。廉価な海外で製造された手頃な製品が巷に溢れ、日本製は高価でなかなか手が届かない。もう少し若者や一般の人々にも伝わる工夫が必要なのかもしれない。原材料を生産し、継承し、守る後継者も少なくなっている。素材や材料がなければ、いくら技術があっても作品を作ることはできない。また、日本だけのマーケットだけで勝負する時代でもなくなっている。

海外でのマーケットを視野に入れるのであれば、国内だけの立ち位置だけでなく、日本の外からのまなざしや価値観で考えることもこれからは必要となるのかもしれない。

アーティスト・イン・レジデンスが果たすもう一つの役割は、さまざまな文化背景を持つクリエイターが価値観やアイデアを共有し、協働する場であり、実験の場でもあるということだ。技術や精神を守るだけでなく、開いていくことにより、日本の工芸の未来も世界に開かれていく可能性があるのではないだろうか。



伝統陶器博物館 Museu de la Terrissa 内部



VOSTOK





阿部 智也

益子国際工芸交流館

1991年、東京生まれ。2009年、東京都立三宅高等学校卒業後、益子へ。2011年、栃木県窯業技術支援センター修了。その後、益子陶芸美術館の陶芸工房スタッフとして勤務。2014年より益子国際工芸交流事業スタッフとして滞在陶芸家の技術サポートを行う。2017年夏、デンマークへ渡り作陶。

今回のAIR研究会の日程から数日前より、益子のAIRから陶芸技術担当として滋賀県立陶芸の森で研修をさせて頂いた。元々当館のAIR事業では利用するアーティストの技術、生活面共にサポート出来る人員が非常に少なく、その中でどのように対応していくのかを考える必要性を強く感じていた。今回の研修では滋賀県立陶芸の森に来館されるアーティストがどのように滞在制作をしているのか。またスタッフが何処まで技術的、生活面でのサポートを行っているのかを主に学ばせてもらいたいと思い、機会を頂いた。

まず感想として、陶芸の森での対応は多くの作家が同時にいることが前提ではあったが、非常にマニュアル化されていてそれぞれのスタッフが分かりやすく、しっかりと意識共有がされていた。そして制作中や生活面でトラブルがあっても即時対応できるだけの状況がしっかりと作り上げられていた。それは事業としての“リスク管理”の一環であり、アーティストとAIRのスタッフの両方が快適に制作とそのサポートを行う上での必須事項である。と強く実感した。

研修として滞在中で来館中のアーティストとも多くの話をする機会を得たが、彼らは陶芸の森の設備、スタッフの技術やサポートにとっても感嘆していた。技術とはそれまでの経験でもあるし、その一部には地域の陶芸研究施設や原料販売店等との協力があると私は思う。益子のAIRは他施設と比べるとせつかくの産地であるのにも関わらず“産地の技術”を十分に利用できていないのではないだろうか。

陶器の産地である益子、当館では基本的に周辺地域の原料の利用を推奨しているが、来館されるアーティストの制作したい“作品”と益子の“地域原料”を組み合わせる制作するにはとても深い知識と広い技術が必要になる。陶芸という専門知識や技術が必要なAIRを行っていく上で、今回の研修の様にそれぞれのAIRでの技術や知識、経験を現場にいるスタッフが共有できるというのはとても有意義であり、貴重な経験であった。現状で充分とは未だ言えないが、アーティストの希望する制作を実現する方法、技術を今後のスタッフにも上手く引き継ぐ方法を作る事も課題の一つではないかと感じている。

AIR施設は、未だそのポテンシャルを生かし切れていないと私個人は思っている。今後の研究会を通して、今回の私だけの研修に留まらず、それぞれのAIR施設が相互に協力や研修などを行い、技術や知識、経験を共有することによって各AIR施設のクオリティの向上、そして独自の特色を見直す良い機会にもなるのではないだろうか。

## AIR 研究会に参加して

29年度に引き続き2回のAIR研究会に参加し、AIRについて深く考える機会を得ることが出来たのは非常に有意義であった。

2回目の研究会では、陶芸の森のAIRの概要について詳しく説明させていただいた。その中でも、過去の滞在作家へのアンケート調査では、サンプル数は多くはなかったものの、陶芸の森のAIR事業について参加者の客観的な評価、問題点など知ることが出来たのは、改めて良かったと思う。既に改善されているものもあったが、これから改善すべき点、私たちが気づいていない点などが多々あったように思う。概ね良い評価が多かったが、アンケートを元に改善し、作家が気持ちよく制作、滞在できる環境をつくるよう努めたい。

2日目のグループ討議では、様々な成果、評価基準について頭を捻って考え、また、他の参加者の方の意見を聞くことが出来たのは非常に貴重であった。その中で、地域にとつてのAIRの評価を考えながら、他の方の意見を聞く中で、作家が街に繰り出し、地元の人々と交流が生まれることで、そこに住む人にとってその地域の良さ、誇り、魅力の再認識につながるという考え方もあると知ることが出来た。どちらかと言うと、市民や地域との関わりのようなことが苦手で、上手くできていないと感じることもあるのだが、そういった考え方もあるということに気づくことが出来たのは良かった。確かに、私たちの知らないところで、個人同士の交流が生まれていることもあり、作家が積極的に交流しているのは素晴らしく、好ましい事だと思う。只、作家の性格によるところもあるので、実際には、他の作家や地域との交流が促進するような状況をつくる事が出来るよう努めたい。

AIRの評価の基準や方法など多岐にわたり、明確にすることは難しいが、今後の研究会を通して理解していきたいと思う。また、他の団体とも交流を深めながら、問題点などへの対処の仕方などを共有し、より良い方向に進んでいけたらと思う。



松波 義実

公益財団法人滋賀県陶芸の森 指導員

1973年 福岡県生まれ。1997年 関西大学文学部哲学科美学・美術史専攻卒業。1999年 愛知県立窯業高等技術専門学校修了後、岐阜県多治見市たくみ窯勤務。2001年より現職。主たる業務は、創作研修館のスタジオ・アーティストへの指導・作品焼成、一般向け陶芸講座（穴窯体験講座・しがらき学ノススメ!）の企画運営、信楽高等学校デザイン科の実習の企画・受け入れなど、多岐にわたる。

今回行ったピア・レビューは他団体でのAIR事業を知る非常に良い機会となった。個人的には特に他団体の制作現場担当の職員の方から直接現場対応やアーティストとの関わり方について話を伺うことができたことは大きい。私自身まだAIR事業の経験は少なく、各団体で事業の目的や規模に違いはあるものの同じ立場からの意見は参考になる点が多々あり、同時にそれぞれで同じような悩みを抱えていることも知ることができた。

事業全体の大きな視点からだけではなく、現場の小さな視点からそれぞれの悩みや課題について情報を共有できるというのは貴重な機会であり、また現場の課題は解決できればそのままアーティストの満足度や作品のクオリティ向上といった成果へと直接つながっていくものも多く、その糸口となる情報を共有することは重要である。こういった点からも、今後も団体間で悩みや課題について共有できる関係性を継続していけるよう努めていきたい。

また、今回の研究会でAIRの評価基準について明確な設定ができたわけではないが、各団体でAIRを実施する目的などは違うものの、それぞれが考えている評価や成果という点ではあまり大きな違いは無いのではないかと思えた。また、同じ言葉を使いつつも想定しているものが違っているといったことなどもわかり、やはり共通の評価基準を設定するというのは難しく、今後も議論を続けつつ、まずそれぞれの団体ごとの評価基準を適切に設定することが必要だと思えた。

今年度は瀬戸市新世紀工芸館ではガラス作家のみを招聘したのだが、瀬戸の土を使い陶芸作品を制作する、またガラスと土、釉薬を組み合わせる試みなど、実験的、挑戦的な活動内容であった。この内容は、瀬戸市新世紀工芸館では作家が普段とは違う素材に触れることができ、またこれら2つの素材を同時に扱うことができる環境にある、ということを再認識するよい機会となった。これは瀬戸という産地の大きな特徴であり、当館で実施するAIR事業の独自性にもつながる。

今後も研究会を通してAIRがよりよい事業となるよう議論を重ね、改めて自身の施設、産地などを見つめ直すことで、瀬戸独自のAIRを実現することができればと思う。

京都芸術センターでは、開館以来アーティスト・イン・レジデンスのプログラムに取り組み、現代の芸術表現を行うヴィジュアルアーツ、パフォーマンスアーツのアーティストを中心にさまざまな作家を受け入れてきた。ミッションの一つには若手アーティストの育成を掲げており、価値や可能性が未知数であるアーティストや取り組みを支援することにも力を傾けている。まだ見ぬ価値の可能性を肯定し多様な創造の契機を育てる土壌づくりとしてのアーティスト・イン・レジデンスは、そうした意図とも合致するプログラムとして期待されてきたことと思う。

研究会では、参加団体や紹介事例の多様な実情に触れることができた。特に陶芸の分野では文字通りその土地と制作が分かちがたい関係にあることや、現地コーディネーターによるサポートを含めて作家の構想を実現するための体制が十分に整備されている様子、充実したハードウェアを求めて作家のコミュニティが形成されていく様子が印象的であった。京都芸術センターは、制作のためのハードには乏しい施設であるが、京都という土地が持つコンテクストや文化に関わるネットワーク、アクセスに価値を見出して制作につなげるタイプの滞在が多く見受けられる。

自身が運営するレジデンス・プログラムの成果をどう評価するかは、各施設が抱える共通の課題である。資金獲得、運営改善、説明責任等さまざまな目的からの要請に対し、定量的成果を求められる一方で有効な評価軸の設定が困難であったり、そもそも個々の事例によって要求や目的が多様であるため比較に適さなかったりといった、根本的な困難が共有された。それは、既存の評価軸にまだ含まれない新たな価値の創造を支える仕組みとしてのアーティスト・イン・レジデンスの可能性を示唆するものでもある。一方で、個々の事例についての客観的な評価（批評等）の必要性や、事後的な評価の前提となるアーカイブやドキュメンテーションの重要性が確認された。これについては、京都芸術センターでも今後の課題としたい。

本研究会への参加は、主に工芸分野に特化したレジデンス・プログラムを運営する他団体とは異なる部分が多いながらも、私たちにとっても自身の活動を振り返る機会となった。専門性を共有する運営者同士として行ったピア・レビューの試みをはじめ、私たちが日々の運営において共通に抱えている課題についての議論を継続していきたい。



伊藤 弘彦

瀬戸市新世紀工芸館

ガラス工芸研修担当職員

1990年 福岡県生まれ。2015年 愛知教育大学 現代学芸課程造形文化コース卒業。2015年より現職。



當間 芽

京都芸術センター

アートコーディネーター

2017年4月～京都芸術センターアートコーディネーター。同館で展覧会事業、ダンス事業等を担当。アーティスト・イン・レジデンス・プログラムでは、A4 Art Museum とのエクステンジプログラムでアーティスト派遣・受入を担当。



吉田 潤一郎  
女子美術大学  
デザイン・工芸学科  
工芸専攻教授

東京都出身。  
1986年東京芸術大学大学院美術  
研究科(陶芸)修士課程修了。  
1991年より女子美術大学専任動  
務。研究分野は陶芸(陶芸作品  
制作・陶芸教育)。2016年 東京  
国際ミネラルフェア(天然鉱物の  
ナノ粒子による釉薬)2018年 粉  
体工学会(天然鉱物のサブミクロ  
ン・ナノ粒子の陶芸への応用)  
研究報告:「貫入発生数を減少さ  
せる釉調合の報告」(2004年、女  
子美術大学研究紀要34号)、文部  
科学省教育CP顔料プロジェクト  
(2008~2010)。

## アーティストインレジデンス研究会参加所感

昨年(2018)9月に女子美術大学(以後、女子美)の杉並校舎でアーティスト・イン・レジデンス(以後、AIR)研究会が開催された際、私は、女子美で陶芸教育を担当している者として参加させていただきました。

信楽、益子、瀬戸、京都の4機関の方々から、スライドを用いた活動報告を伺うことができました。それぞれに興味を魅かれるご説明でしたが、陶芸指導にたずさわる私にとりましては、やはり陶芸に関する2つのスライド報告が特に印象に残っています。

ひとつは、大容量の近代炉で巨大な陶造形物を作り、それを東京まで運搬して展示を行うというプロセスを映したスライドで、もうひとつは、伝統的な薪窯で何日もかけて窯焚きをして焼き上げるスライドです。2つとも陶芸家にとっては個人ではなかなか持つことのできない憧れの設備での制作実践でした。

女子美にもそのような設備はありませんので、本学でも設備を導入し、学生にそういった制作体験をさせてあげたいという思いが湧いてきました。けれども、AIRの方々のご説明をうかがって、やはり難しいだろうとも思いました。

そのような大規模な制作に伴う燃料や材料の消費量と、設備の維持管理、そしてなによりも、制作に必要なとされる人的サポート面のお話をうかがいますと、大学教育ではなかなか実現しにくいことだと感じました。

あらためて、AIRの存在意義を実感いたしました。また、そのようなすばらしい制作環境に招聘していただいて制作実践が行えるアーティストはさぞや幸せであろうと思えました。女子美の陶芸の卒業生は残念ながらまだ招聘いただいたことはありませんが、ゆくゆくはそのような作家も出てくるのではないかと楽しみにしているところです。

さて、この度の研究会には、ここ1、2年の女子美卒業生も6人参加させていただきました。今まさに、社会人として働きながら制作を続けていくことの難しさに直面している人たちです。まだ経済力も作家キャリアも少ない彼女達にとって、AIRの方々と直接お話のできる場に参加できたことは大変有意義なことで、6人とも大変喜んでおりました。ありがとうございました。

教育の場である美術大学と実践の場であるAIRとの距離がより近くなり交流が深まることで、卒業後間もない作家キャリアのほとんどない人たちにも経済的負担の少ないかたちで制作実践への道がひらかれるような、今までになかった新しい企画が生まれれば大変ありがたいと思っております。ご検討のほどどうぞよろしくお願いいたします。

最後に、このたびAIR研究会参加の機会をくださいましたAIR研究会モデレーターの日沼禎子女子美術大学教授に感謝申し上げます。ありがとうございました。



## AIR という創造の場そして館—Y-AIR のお話

村田 達彦 遊工房アートスペース 共同代表

2018 アーティスト・イン・レジデンス研究会&トークショー「アーティスト・イン・レジデンスについて考えてみませんか」の発表の機会を有難うございました。今回の女子美杉並キャンパスでのAIR研究会のテーマ「大学教育の現場から」として、女子美・日沼研との2012年来の活動の一端を今回の研究会で紹介させて頂けて光栄です。女子美・日沼研と遊工房アートスペースの協働活動と共に、国内外美大との協働事例など、AIR運営者の視点から話をさせて頂きました。

遊工房アートスペースは1989年来、海外からの滞在制作を希望するアーティストの館として運営している、私設の活動ジャンルを問わない、ユニークな存在のマイクロレジデンスです。年間を通し、1カ月から半年の芸術家が20人前後滞在をしています。この中には陶芸家も時々いて、地元の陶芸教室や公立学校の陶芸窯などの使用協力を頂き、地域に根を生やした運営もしています。

多様性の受容される社会への成熟のためにもAIRが持つ役割は大きいものがあると考えます。世界中に多様な形で運営されているAIR、国内では公設や公的資金で運営するものが多く目につくと思いますが、民営、私設のこじんまりしたAIRも、海外並みに存在していることは、あまり知られていないような気がします。また、アーティスト主導の運営が多いのも一つの特徴だと思います。こうしたマイクロな存在のAIRとマクロな存在の美術大学との協働で生まれる無限の可能性を、実践を通し試行し、AIRと美術大学の織り成す世界ネットワーク作りがY-AIRの始まりです。

陶芸の地場産業の基盤の上にあるAIR運営グループと、地元の職業専門校や美術大学との取り組みを知り、大変印象に残ったことは、アーティストへの新たな発想の場の提供と共に、アーティスト、プロの技術者である職人、そして市民の多層への活動の普及、人材育成への展開の現実です。引き続きこのユニークな研究会への活動交流をお願いします。



松井 匠 奈良県文化振興課 文化芸術力向上係

奈良県では、2021年に「なら歴史芸術文化村」の開村を予定しています。そこでは、文化財修復や道の駅、ホテルなどの複合的な機能を備え、AIRの運営も検討しております。

これから行政としてAIRの運営を検討するうえで、行政の事業は、単に事業を実施して終わるということではなく、その事業の分析・評価をして次の事業に生かすことが求められます。また、事業を分析・評価するためには指標をどのように設定するかが重要であると考えています。

この研究会では既に運営がなされている施設の指標がどのようなものかを知るいい機会となりました。例えば、参加アーティストの人数や一般参加者の人数といった定量的な指標を用いたり、利用者満足度といった定性的な指標を用いたり、各施設により様々な指標を用いており、今後さらなる分析・検討の余地がある分野であるかと思えます。

指標が様々なものに分かれる理由として、AIRはプロセスを重視するため、評価が難しいという点は皆様に指摘されているところです。そのうえで、AIRを評価するためには、AIRのプロセスのうち何を重視するかを設定すべきだと思います。プロセスのうち何を重視するかということが、そのAIRの発想の根幹であり、特色でもあると思います。

研究会では様々な立場の方とのグループワークがあり、何を重視しているのかはそれぞれのAIRによって異なることを実感しました。重視しているものとして、例えば、アーティストの満足、施設やアーティストとのネットワーク、一般市民の芸術に触れる機会の頻度など多岐にわたります。

AIRの成果指標を決めるには、まずプロセスのうち最も重視することを決めること(自ずと決まるかもしれませんが)、そしてその重視するものに合う評価指標を設定することが重要だと感じました。もし、一般市民との交流を重視するならば利用者満足度などを評価指標として設定し、アーティストの気づき・技術的な成長を重視するならば専門家レビューの結果などを成果指標として設定するといった、それぞれ重視するものに対して柔軟に対応する必要があるかと思えます。

AIRの運営において、評価指標を決めることが目的ではなく、あくまでよりよいAIRを導くための手段であることを念頭に置きながら検討を進めていければと考えております。今回の研究会に参加したことで、様々な立場の方の意見や発想に触れることができましたので、今後生かしていきたいと思えます。ありがとうございました。



真野 友理子

静岡文化芸術大学大学院  
文化政策研究科  
文化政策専攻 1年

## AIR 研究会に参加して

私は現在、修士論文のテーマとしてアーティスト・イン・レジデンスの評価手法を研究している。そのため、「レジデンスの運営マニュアルの策定」と「レジデンスの評価基準」をテーマとする第2回AIR研究会にオブザーバーとして参加させていただき、研究者や実務家の方々の意見交換を間近で見る機会を得た。研究会の中では各施設の状況や取り組み内容について担当者から直接お話を伺うことができたり、また評価手法として「ピア・レビュー」を取り入れることの可能性について知見を得ることができたりして実に有意義な研究会であったと感じている。

アーティスト・イン・レジデンスは団体や施設が主導するもの、芸術祭の中で取り組まれるもの、アーティストが主導するもの、と多様なスタイルがある。またその目的も様々で、かつ支援の仕方も事業主体ごとに特徴がある。このようにアーティスト・イン・レジデンスは一概に説明のつく取り組みではない。それぞれが個性溢れるユニークな活動であることは確かであるが、それゆえに評価が難しい領域であると思う。各事業主体は自らが実施するアーティスト・イン・レジデンスの意義や効果を明示したり言語化したりすることが出来ないもどかしさを抱えているに違いない。一方で、公的支援を受けるにあたって評価は避けられないプロセスである。現状としてそこでは定量的な評価がなされるのが一般的であり、定性的にその特徴や意義、効果を測定するには至っていない。

そこで、今回紹介された「ピア・レビュー」に大きな期待を寄せたいと思う。将来的には本研究会に参加している施設だけでなく全国的なネットワークにおいて条件や環境の似た事業主体をグループ化し、ピア・レビューが実施されるのが望ましい。グループ化のための分類項目としては運営体制別や目的別、対象分野別などが想定されるだろう。似た状況を抱えるアーティスト・イン・レジデンスの事業主体同士で評価を行うことで、定量的には示せないが評価できる点などを発見し、また改善点についても同業者の視点で見出すことができる。これは、効果的なPDCAサイクルに繋げてゆくことは勿論のこと、現場の担当者を励ますことにも意義がある。或いは、アーティスト・イン・レジデンスの運営についてノウハウの蓄積された事業主体とそうでない事業主体とでグループを作ることで、ノウハウの伝達や事業主体同士の連携強化の可能性もあるかもしれない。

今回の研究会においては、アーティスト・イン・レジデンスに関する研究の促進の必要性を実感するとともに、研究の蓄積がまだそう多くはないからこそ多様なチャレンジが可能であるという余地を改めて見出すことができた。研究会で得た知識、経験を修士論文の研究に生かしたいと考えている。



## 高橋 萌奈

女子美術大学美術研究科  
美術専攻  
工芸研究領域（陶）  
卒業生

## AIR 研究会を通じて感じたこと

アーティスト・イン・レジデンス(AIR)研究会1日目では、様々なレジデンスから受け入れる側の話を聞くことができました。特に取り上げられていたのは、海外の作家や著名な作家を招聘した際の話が多かったように感じました。とても興味深い話でしたが、私が卒業して間もない立場であり、AIRに参加する側なので、今後制作活動を続けていきたい学生(作家の卵)や作家志望の卒業生、若手作家との関係についてもっと詳しく聞きたかったです。

「作家として活動したい・制作を続けたいが制作場所や環境がない」といった卒業生や若手作家は非常に多いと感じています。そういった人たちがAIRを通じて、それぞれの土地で生活しながら作品制作をし、その土地の風土や文化の中で育っていく人がこれからもっと増えていくと良いと思いました。

学生や卒業生の中には、まだAIR自体を知らない人たちも多いと思います。そのため、作家志望の学生・卒業生や作家活動をしている人にもAIRについて知る機会を増やすことができれば、卒業後の一つの選択肢としてAIRに参加する人がもっと増えていくのではないのでしょうか。

土地・地域から刺激を受け、新たな作品を生み、新たな価値観を気づかせてくれる可能性を持っているこのプロジェクト。今回AIRというプロジェクトについて知ることができたのは、自分の中でも大きな収穫でした。この経験を生かし、私も作家として制作を続けるための道をこれからも探していきたいと思います。

## 矢島 由梨

女子美術大学美術研究科  
博士前期課程デザイン専攻  
アートプロデュース研究領域 1年

## AIR 研究会で見出したこと

今回「アーティスト・イン・レジデンス研究会及びトークショー」に参加させていただき、実際に運営団体の方々のお話を伺い改めてAIRについて考えを深めることができました。

AIRは、アーティストの作品制作にとってプラスになることを第一に考えられるということでしたが、アーティストが滞在する地域にとってもプラスになることが大事な意義だと思いました。AIRのアーティストの作品制作の支援や地域のその他のアート事業との連携は、アートが社会に発信される過程で中核となる役割だと考えています。社会全体の文化交流や地域の活性化にとってAIRは重要な存在になっていくと思います。

## 袁 媛

女子美術大美術研究科  
博士前期課程デザイン専攻  
アートプロデュース研究領域 2年

## AIR 研究会について考えの一つ

ますます多くの芸術家がアーティスト・イン・レジデンスを通して、世界を体験し、視野を広げて、創作しています。

2017年7月に3週間学生としてチェコの西ポヘミア大学に滞在し、初めてAIRのことを体験しました。特に女性芸術におけるアイデンティティについて研究している私にとっては、異なる文化的背景をもつ人間同士と一緒に勉強し、生活し、実際に肌で西洋文化を体験して大いに啓発されました。異なる環境の中では自己発見し、自分が何者が再認識することができます。

この度参加させていただいたアーティスト・イン・レジデンス研究会及びトークショーを通して、運営者、研究者の方面からAIRを再認識しました。AIRには人材育成だけでなく、地方創生、芸術教育普及、資源活用、国際交流など様々な社会的意義があり、国の文化発展にとって非常に多くの期待が寄せられています。

伝統的なAIR運営組織と違って、中国でAIR運営しているショッピングモール組織もだんだん増えてきています。例えば、香港から今中国の北京、上海、天津、広州、武漢などにあるK11は、めざすのはアート・ナチュラル・カルチャーの融合です。世界各国注目すべきデザイナーやブランドを取り揃えて、アーティストたちのハンドメイド作品を集めて販売します。そうすることで、資源活用し、地域に民衆に影響を与えることができます。

最後に、アーティストの話に戻りますが、多くのアーティストにとっては、アーティスト・イン・レジデンスプログラムは大学を卒業した後の教育を受け続けるだけでなく、奇妙な未知環境で創作意欲を刺激するための重要なプログラムだと思います。



## 資料集

研究会内においてピア・レビューを行うにあたり、陶芸の森におけるアーティスト・イン・レジデンス事業に対する自己評価・分析のための資料を参照したが、本報告書にその一部を抜粋して掲載する。

## ■ 陶芸の森アーティスト・イン・レジデンスに参加された方へ ■

### To all of you participated in for Artist in Residence

陶芸の森での滞在はいかがでしたか。

今後のアーティスト・イン・レジデンスの参考にさせていただくため、アンケートへのご協力をお願いいたします。皆さまの率直なご意見をお聞かせください。

Please take a few minutes to answer this questionnaire, the purpose of this survey is to help us make our program stronger for future Artist in Residence.

Please be honest with your answers. Overall how was your stay in SCCP?

創作研修課長 杉山 道夫

Chief of the AIR Program

Michio Sugiyama

## 制作について / About your work

1. 応募時に計画されていた「制作内容」は達成されましたか?

達成された理由、または達成できなかった理由をお答えください。

Were your "production goals" in your application accomplished?

Please expand on how your goals were achieved or not achieved.

達成度 / Level of achievement ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

2. スタジオの制作環境はどうでしたか?

Were you satisfied in our studio environment?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

3. 必要な機材、道具等がありましたか?

Were you satisfied in our equipment and tools?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

4. 窯は十分にありましたか?

Were you satisfied in our kilns?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

5. 今回の滞在によって得た知識や技術等があれば、それらを得た経緯を含めてお書きください。

Did you gain any new technical knowledge during your stay?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

6. 作品制作におけるスタッフの指導・制作補助はいかがでしたか?

How was your experience with the staff?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

## 宿泊施設について / About Dormitory

7. 個室の環境はいかがでしたか?

Were you satisfied in our dormitory, specially your room environment?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

8. 共用部分の生活環境はいかがでしたか?

Were you satisfied in our dormitory kitchen, and salon etc.?

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

低い/Low ← → High/高い

9. 生活をする上で、他に定めた方がよい規則等ご意見があればお書きください。

Do you have any ideas or opinions about current rules and or policies for both the studio and or housing?

10. 滞在中に他のアーティストとの交流はできましたか？ また、トラブル等があればお書きください。

How was your experience with the other artists?

Please let us know if there were any troubles or complications during your stay.

満足度 / Level of satisfaction ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )  
低い/Low ← → High/高い

11. 滞在中に信楽の作家や、町内の方との交流は持てましたか？ 具体的にお書きください。

Were you able to connect or develop relationships with the artists of Shigaraki and / or any other people in the community? Tell me whom you saw.

達成度 / Level of achievement ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )  
低い/Low ← → High/高い

12. 滞在中に訪れた場所を教えてください。

Please tell us of any other places that you visited in Japan during your stay.

13. 研修費や宿泊代を含めた、月々の使用金額を教えてください。

Please provide information of costs occurred during your stay, including studio and living expense.

- |                              |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| (1) 10万円以下                   | (2) 10～12万円未満                | (3) 12～15万円未満                |
| (4) 15～20万円未満                | (5) 20万円以上                   |                              |
| (1) under 100,000yen         | (2) 100,000yen to 120,000yen | (3) 120,000yen to 150,000yen |
| (4) 150,000yen to 200,000yen | (5) 200,000yen and over      |                              |

※他のレジデンス機関に滞在経験のある方のみお答えください。

Please answer the next few questions if you have attended other residency programs.

14. 滞在経験のあるレジデンス機関を教えてください。

Please provide a list of other residencies that you have attended.

15. 制作の中で他レジデンス機関ではできなかったが、陶芸の森ではできたことはありますか？ また、陶芸の森ではできなかったことはありますか？

How does SCCP differ from other residencies?

16. 他レジデンス機関での生活はどうでしたか？

陶芸の森で取り入れた方がよい規則等ありましたら教えてください。

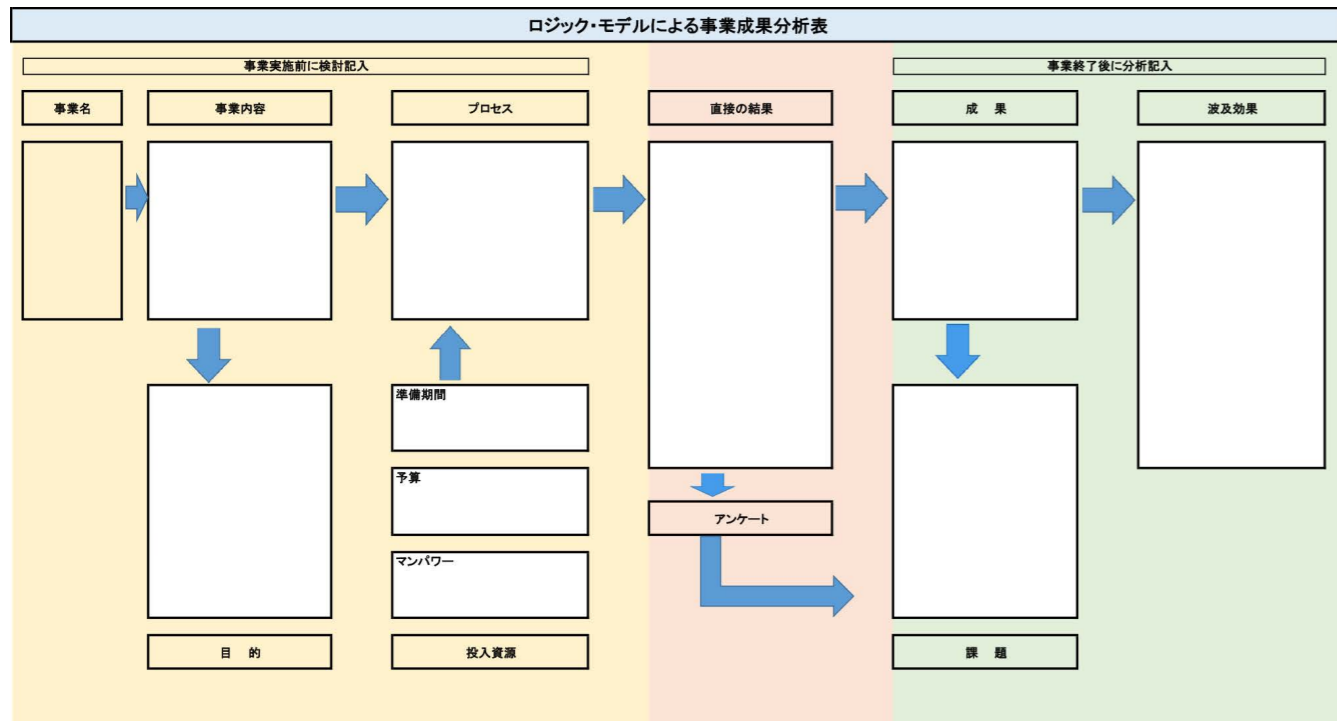
If you have attended other residencies, is there any policies or rules that you think would be good for us to consider at SCCP?

17. 他レジデンス機関のスタッフの指導や補助について教えてください。

Please tell us about your experiences with the instruction and / or assistance of the staff at other residencies. How does that differ from SCCP?

ご協力ありがとうございました。

Thank you for your help in providing this information!



# 陶芸の森 アーティスト・イン・レジデンスでのエピソード

## 作家個人—AIR が出会いの場であること

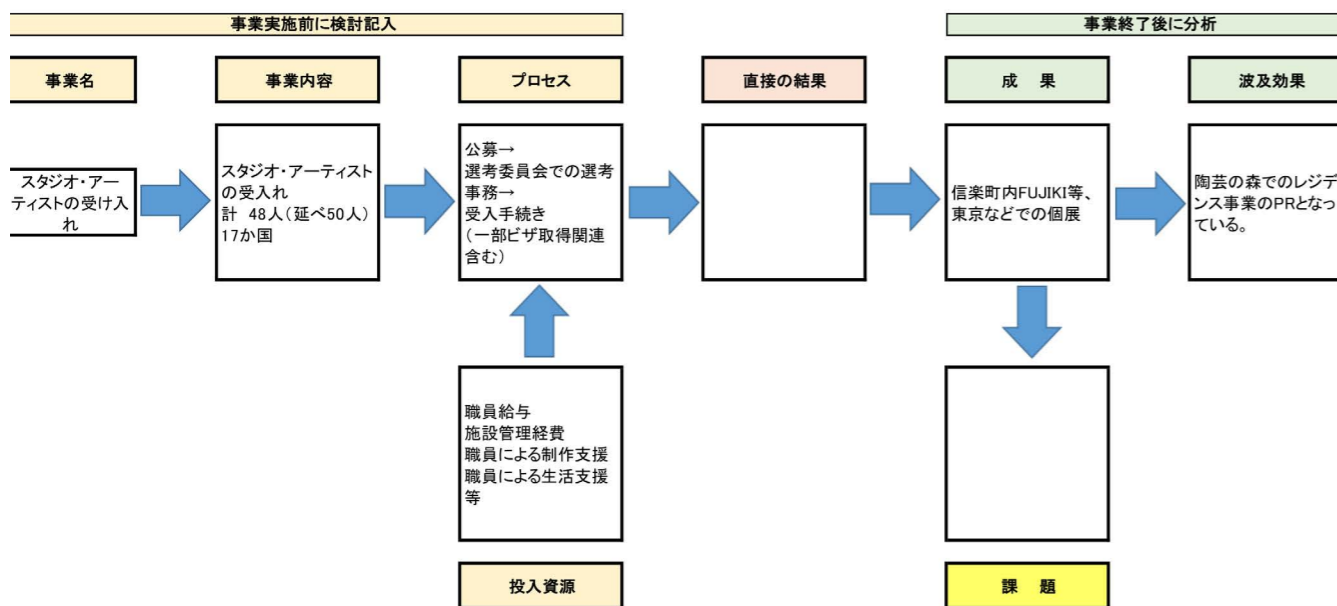
- ・陶芸家として個人のネットワークが広がる⇒海外での制作、個展開催等
- ・派遣事業が作家のビジネスにつながった事例として、昨年、文化庁補助事業の枠の交換プログラムで台南芸術大学（台湾）に派遣した高橋由紀子さんが、現在台南のギャラリーで個展を開催。
- ・結婚

## AIR 機関として—外部での展覧会

- ・当館の AIR 事業で来館制作していた作家が、KAIKAIKIKI ギャラリーで個展を開催。そのながれで KAIKAIKIKI を主宰する村上隆さんのトークショーが開催できた。⇒ AIR 機関としての陶芸の森のネットワーク拡大。
- ・当館で制作した作品が、個展等で発表されることにより、業界内で当館の知名度が上がった。  
事例—奈良美智、イケムラレイコ、桑田卓郎

AIRを主催する側として最大評価されるべきなのは、歴史的な評価であると考えている。例としては、アメリカのArchie Bray Foundationで1952年に撮影された下の写真（YANAGI Soetsu, Bernard Leach, Rudy Autio, Peter Voulkos, Hamada Shoji）と、その後のPeter Voulkosの活躍とそれに対する評価であると思うが、このような評価は一定の期間（歴史）が必要であらう。

ロジック・モデルによる事業分析表(「スタジオ・アーティスト受入」に対する記入例)



archie bray foundation peter, rudy, Yanagi leach

# あしがき



**日沼 禎子**  
女子美術大学教授  
AIR ネットワークジャパン事務局

陸前高田AIRプログラムディレクター、女子美術大学芸術学部卒業後、ギャラリー運営企画会社、美術雑誌編集者等を経て、国際芸術センター青森設立準備室、同学芸員を務める。アーティスト・イン・レジデンスを中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会を多数企画、運営。その他、さいたまトリエンナーレ2016 ディレクター（2014～16）、ときわミュージアムアート・ディレクター（2017～）、Trans Cultural Exchange Advisory Board（2018～）等を歴任。

2カ年目となる、陶芸の森の主催による「アーティスト・イン・レジデンス研究会」において、ファシリテーター及び、本報告書の編集に関わることができました。このような貴重な場に、本学の学生共々立ち会わせていただきましたこと、改めて御礼申し上げます。

私自身、AIRの現場に携わるようになりましてのが1990年代。いわば、日本におけるAIRの黎明期と言われた時代から四半世紀近い年月が経ちました。そこから、AIRの多様化が進み、AIRの場を活動のフィールドとする国内アーティストの数も増加し、また、AIRに対する公民からの助成制度などの支援の機会も増え、少しずつ社会装置としての顕在化が進んできていると感じています。また、現在では国内でも数多くの芸術祭が開催され、地域資源を活用した文化の発信であるとともに、地域経済の発展への貢献に大きな期待が寄せられています。アーティストの活動の場と、多様な観客・参加層の獲得という点では、こうした芸術祭のような場は大いに発展すべきものと考える一方で、表現する側、作り手であるアーティストにとって、その場に関わることで消耗されるスピードは相当なものであると推察します。本来、ものづくりとは、ゆっくりと思考すること、そして、トライ＆エラーの試行錯誤の中で醸成されてゆくものです。そうした場と時間が与えられること、その根源的な活力を生み出す場がAIRであることは間違いありません。

本研究会は、やきものの産地でAIRに取り組む4つの館が集まることにより、素材、担い手という最も重要な基盤の存在や課題を明らかにし、その産地に関わる人々の知恵と技術を注ぎ込み、長い時間をかけて培ってこられたその豊かさを改めて示して下さいました。AIRはそうした先達者が築いてきた基盤の上に立ち、人、情報を受け止めるアンテナのような存在であり続けることが求められているのではないのでしょうか。そこから繋ぎ得たさまざまな発見、アイデアは豊かな養分となり、枝葉を伝い、幹を強くするでしょう。そのアンテナが常に良い感度を保つためにはどうしたら良いのか。そして、それらを世界に等しく拡散し、相互に豊かにするためのオープンソースとなり得るのかを、議論し、検証していくことが、ネットワークの役割と考えています。4つの館で始まった、少数でも強い信頼でつながれたこのネットワーク研究会での議論と成果が、多くのAIR運営者へ、そしてこれからAIRを始めようとする方々にも届くように、微力ではありますが、今後もこうした活動に参画させていただきたいと思っております。

末尾になりますが、本研究会の開催ならびに報告書作成にあたりご協力をいただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

## アーティスト・イン・レジデンス研究会出席者

### ●モデレーター

菅野幸子（AIR Lab アーツ・プランナー／リサーチャー）  
日沼禎子（女子美術大学教授、AIR ネットワークジャパン事務局）

### ●ゲストスピーカー

吉田潤一郎（女子美術大学 デザイン・工芸学科 工芸専攻教授）  
村田達彦（遊工房アートスペース 共同代表）  
辻真木子（遊工房アートスペース）  
伊藤 準（陶芸家、瀬戸）  
西條 茜（陶芸家・美術家、京都）  
床井崇一（益子焼伝統工芸士会会長、益子）  
村田 彩（陶芸家、信楽）  
吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事）  
山出淳也（BEPPU PROJECT 代表理事／アーティスト）

### ●滋賀県立陶芸の森（公益財団法人滋賀県陶芸の森）

松井利夫（理事長兼館長）  
森野泰起（副館長兼事務局長）  
杉山道夫（事務局次長（技術）兼創作研修課長）  
松波義実（創作研修課主査）  
安藤祐輝（創作研修課指導員）  
吉田洋子（創作研修課事務員）  
鈎 真一（主任学芸員）  
樋口久子（総務課主任主査）  
佐々木翔（総務課主事）

### ●瀬戸市新世紀工芸館（公益財団法人瀬戸市文化振興財団）

服部文孝（瀬戸市地域振興部文化課課長・瀬戸市美術館館長）  
山崎真以（業務課主事）  
伊藤弘彦（瀬戸市新世紀工芸館 ガラス研修担当）  
屋我優人（瀬戸市新世紀工芸館 陶芸研修担当）

### ●京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

勝治真美（プログラムディレクター）  
當間 芽（アートコーディネーター）

●益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子（益子町産業建設部観光商工課）  
法師人弘（益子陶芸美術館 館長）  
月村真由美（益子国際工芸交流事業主任）  
阿部智也（益子陶芸美術館陶芸工房管理）  
大西昌子（地域おこし協力隊）

### ●女子美術大学

袁媛（女子美術大学美術研究科博士前期課程デザイン専攻アートプロデュース研究領域 2年）  
矢島由梨（女子美術大学美術研究科博士前期課程デザイン専攻アートプロデュース研究領域 1年）

### ○アーティスト（オブザーバー）

鈴木寿一（女子美術大学 デザイン・工芸学科 非常勤講師）  
碓井直弘（女子美術大学 デザイン・工芸学科 非常勤講師）  
関根佳代子（女子美術大学 デザイン・工芸学科 非常勤講師）  
廣瀬結香（陶芸家、女子美術大学 OG）  
岩沢詩央（陶芸家、女子美術大学 OG）  
小倉のわ（陶芸家、女子美術大学 OG）  
高橋萌菜（陶芸家、女子美術大学 OG）  
宮本果林（陶芸家、女子美術大学 OG）  
羽柴桃子（陶芸家、女子美術大学 OG）

### ○静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科（オブザーバー）

真野友理子（研究科1年 片山研究室所属）

### ○奈良県（オブザーバー）

松井 匠（奈良県文化振興課 文化芸術力向上係）  
丸岡 嘉人（奈良県国際芸術家村整備推進室）  
松村奏子（奈良県国際芸術家村整備推進室）

## 平成 30 年度 アーティスト・イン・レジデンス研究会＋トークショー報告書

主 催	公益財団法人 滋賀県陶芸の森
開催協力	益子国際工芸交流館／益子陶芸美術館 公益財団法人 瀬戸市文化振興財団 公益財団法人 京都市芸術文化協会 女子美術大学 芸術学部 アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室
協 力	女子美術大学 芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻研究室 遊工房アートスペース
発 行 日	平成 31 年（2019 年）3 月 20 日
発 行 者	公益財団法人 滋賀県陶芸の森
編 集	公益財団法人 滋賀県陶芸の森 女子美術大学 アートプロデュース表現領域研究室： 日沼禎子（教授）、矢島由梨（女子美術大学 博士前期課程 1 年）
デ ザ イ ン	王淑君（女子美術大学 博士前期課程メディア研究領域 1 年）
助 成	平成 30 年度 文化庁アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業





平成30年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業  
Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2018